

# 不登校の認識変容に関する研究

チーム名：チーム志塾

橋本 幸弥

本報告は、登校に対する社会的なネガティブな認識を変容させることを目指して実施したワークショップの実践報告である。近年、不登校の児童生徒数は年々増加しており、その背景には学校への不信感や心理的負担など多様な要因が存在する。しかしながら、「不登校」という言葉そのものが否定的な印象を与えている現状があり、社会全体としてその理解を見直す必要がある。そこで筆者は、フリースクールでの実践経験を踏まえ、不登校をテーマにしたワークショップを企画・実施した。大学生や高校生を対象に、事前・事後の自由記述を通して不登校に対する考えを言語化し、熟議を通じて認識の変化を促すことを目的としたものである。本報告は、その企画から実施、参加者の記述内容の分析までを通して、不登校に対する理解を深め、より多様な学びのあり方を考えることを目指すものである。

**Keywords** : 不登校、ネガティブ、認識変容、フリースクール、ネガティブ

## 1. 背景と目的

近年、不登校の生徒数は11年連続で増加傾向にあり、その生徒数は小学校、中学校合わせて34,682人で過去最多の人数となっている。また高等学校においても68,770人となっており3年連続で増加傾向にある<sup>1)</sup>。しかしながら、不登校という言葉が与えている社会への認識はポジティブなものとは言い難い。

実際、文殊が大学生49人に行った質問紙によるプレ調査によると、「「不登校」は、対人関係において回避的、逃避的であると見なされているようである。」<sup>2)</sup>と報告されている。また、その後に行ったポスト調査では、ネガティブなイメージがポジティブなイメージへと変容したことも報告されており、不登校生徒の実態について知ることができれば、不登校という言葉がもつイメージを払拭できる可能性を示している。

しかし、この調査は2002年に報告されたものであり、必ずしも現代の不登校に対する認識と捉えられるものではないため、本研究では、再度不登校に対する認識を探り、不登校に対する負の認識を変容させることを目指すものである。

## 2. 方法

### 2-1 ワークショップ企画

フリースクールのスタッフとして約半年間、不登校の生徒と関わらせていただき、自身が感じたことや気づいたことを元に不登校に対する認識変容を目的とするワークショップを企画した。当初、Aフリースクールの理事長にお話をさせていただいた後、問題提起を行い参加者と不登校について熟議する予定であったが、諸事情により中止となった。

そのため、筆者自身がこれまで体験してきたことを通して問題提起を行い参加者との熟議を行った。

### 2-2 ワークシートへの記述内容

本ワークショップは8月31日に行った。ワークショップを始める前に、不登校に対する認識を調査用紙に自由記述の形式で記述を実施した。その後、不登校について議論を行うため問題提起を行い、自身の意見を自由記述で記入を実施し、参加者同士で熟議を行った。そして、最後に不登校への認識がワークショップ以前と以後でどのように変化したのか、及びワークショップ全体を通しての感想の記入を実施した。ワークショップの参加者は、大学院生1名、大学4年生1名、大学3年生1名、高校2年生2名の計5名であった。その結果を以下表1に示す。()の数字はその人数を示す。

表1 不登校に対する認識

Q1 不登校に対してどのようなイメージがありますか。

- ・ここ数年増えている。(2)
- ・学校に数人はいる。
- ・先生がその子の家に行く。
- ・普通じゃない。
- ・もったいない。(2)
- ・心理的に追い詰められた子が多い印象。
- ・何らかの事情がある。
- ・良くも悪くもない。
- ・教師への不信感(2)
- ・行きたくても行けない子(2)
- ・学校に通うことに対して何かしらの負のイメージを抱えてしまい不登校になってしまう。(いじめ、学業不振)
- ・保健室登校といった対応がされるが、教育として提供できるものは限られている。
- ・学校に行きたくない。
- ・人間関係の不和。
- ・起立性調節性障害。
- ・誰にも相談できない。

Q2 不登校にはマイナスのイメージがあるが呼び方を変える必要があるのか。変えたとしたどのような名前がよいのか。

- ・いじめやいじりの言葉に使われている。  
昔から使われている言葉だから今の時代には合わない。
- ・ある。
- ・休息期間。  
休むことには善も悪もない。休みたい今は立ち止まりたいという思いは大切であると考えますが、問題はそれに対して教師や親が何を感じるか。  
不登校は学校側のイメージ、それに対して休みなら個人のイメージ。
- ・変える必要がある。  
時代の変化で背景要因が複雑化。レッテルを貼られると復帰が困難に。  
変える必要がない  
新しい場所があるのならそれでOK?
- ・行きたいけどいけない子

選択的登校？

行きたくない子

名前を変える必要性は、

Q3 現在では法的に学校として認められていないフリースクールなどを学校として認めるべきか。認めるならその条件は？認めないなら、不登校の子どもたちの学びをどのように評価するのか。

- ・認めるべき  
学校の役割は勉強だけでなく、人との関わりを学ぶところでもあり、フリースクールもその役割を果たすから。
- ・認めるべき  
生徒にとっても新しい学びがあるかどうか。
- ・認めるべきではない。  
地域コミュニティの一環としての学外施設として整備すべきと考える。本来の「学校」が果たす教育機関としての役割から大きく離れており、そのためには従来の「学校」とフリースクールは区別するのがよいのではないか。
- ・認めるべき  
学校という型に当てはまらない人の受け皿としてフリースクールは必要。授業料、卒業認定基準、支援者、規模等、学校に準ずる規則は必要。
- ・認めるべき

Q4 不登校に対する認識がどのように変化しましたか。

- ・不登校に良いも悪いもない。  
不登校やフリースクールが抱える問題は当事者のことよりも、金銭面やどの程度支援ができるのかという問題が大きいと感じた。
- ・不登校の生徒に対して「フリースクール」という別の場があり、学校に行っていないからといって将来が保証されていないわけではないし、学校とは別の楽しさや学びがある。マイナスなイメージを多少持っていたが、今はマイナスなイメージが取り除かれた。
- ・フリースクールの存在は知らず、不登校の子どもたちの居場所として新しい取り組みをしていて凄いと感じた。不登校に対するマイナスなイメージに関して、教育の側面からどのようにアプローチしていくか、過度な干渉にならない

ようにするにはといった、多くの問題がある中でのフリースクールはもっと充実していくことができればよいと実感した。

- ・学校に通わない＝負のイメージがあった。しかし、学校という型にはまらない子たちを救うセーフティネットとしての選択肢は必要であると感じた。不登校は、将来の選択肢を増やす期間あるという認識を得た。
- ・自ら選択して登校しない子どもたちの多様な学びに気がつかされた。自分に合う学びの方法は学校だけではないと思った。

---

本日の感想などをお願いします。

---

- ・不登校と呼ばれる子にとってフリースクールは良い場所だと思うけど学校と同じになってしまっただけでは意味がない。学校と同じものとして認められる必要はないと思った。ただ、完全に自由な場所だと今のB市とC市の違いや差ができてしまう。フリースクールは学校としては扱わないけれど、登校日として扱うかなどの基準は必要。
- ・フリースクールという場の定義が難しいと感じた。今のフリースクールの「自由」を残すためには学校として認められるべきではない。だが、学校に行っている人からしたら学校は楽しいものだからこそもったいないと感じる。将来、学校に行っている人と同じコミュニティで過ごしていたかなければならないので、できるだけ同じ過程の方が良いのではないかと考えた。
- ・フリースクールならではの「自由」さや、不登校という言葉のイメージに関して新しい一面を感じることができた。やはり全てにおいて、行きたくても行けない子の存在をどうするかは考えないといけないなど実感した。生徒の居場所を担保することはこれからの教育では考えていかないと実感した。
- ・フリースクールという社会における教育の場について知ることができ、有意義であった。学校の役割について改めて考える機会であり、フリースクールが担うセーフティネットに興味を湧いた。
- ・フリースクールがセーフティネットであり続けるために補助金と制限の中で落としどころが難しいと感じた。不登校のマイナスのイメージ改善は学校を行かなければならないという固定概念が影響しているのかなと感じた。学校でしか学べないこともあるが、フリースクールでの学びがあっ

ている子どものことを考えなければならないと思う。

---

### 3. ワークシート記入結果の考察・課題

Q1 から重複した意見として「ここ数年増えてきている」「もったいない」「教師への不信感」「行きたくても行けない子」といった意見があげられた。先行研究で指摘されているよう「不登校」に対してポジティブな要素を含む回答は得られなかった。

Q2 からは、「不登校」という呼び名を変えた方が良いという意見が多かった反面、呼び名について具体的に新しい呼び名を考えられる学生は少なかった。その中でも、あがった名前は「休息期間」であった。この呼び名については、名前から「ネガティブ」なイメージは抱きにくいいため良い呼び名であるのではないかと考えた。ただ、呼び方として定着するかについては疑問がのこる。

Q3 ではフリースクールを学校として認めるべきという意見と認めるべきではないという意見に二分し、興味深い結果となった。認めるべき理由として学校では学べないことが学べるからというような意見が主だった。しかし、「学校ではない」と主張している点については何か矛盾しているのではないかと感じた。ただ、フリースクールという施設を下に見るのではなく並列的に思考していることが読み取ることができた。また、認めるべきではないという意見では、単に批判をするのではなく、学校にすることによって現在フリースクールが持っている長所を制約してしまう可能性があるため、地域コミュニティの一環として整備を進めていく必要があるのではないかと主張であると推察することができる。

Q4 では、本ワークショップで目的としていた、「不登校＝負登校」の認識について変化をうかがうことができた。決して不登校がポジティブなイメージに変容したわけではないが、ネガティブなイメージを持つ学生がいなくなった結果をみるとワークショップを行った意義があるといえるのではないかと考えた。

最後に、ワークショップの感想では学生自身からも課題について自身の言葉で表出していることがみえ、次はその課題をどのように解決していくのかについても熟議をできれば面白いのではないかと感じ

た。

#### 4. 今後の展望

本プロジェクトを通して、不登校に対する社会的認識はまだまだポジティブとは言い難く、依然としてネガティブな方向に捉えられる傾向があることが明らかになった。ただし、本ワークショップは少人数での実施であったため、今回の結果は一つの傾向を示すにとどまる。さらに、「不登校」という呼称そのものが否定的な印象を生み出している可能性も考えられる。現在は、学校に通っていない生徒が一律に「不登校」と呼ばれているが、その背景や事情は多様である。今後は、より多くの参加者を対象とした議論を重ね、この呼称の妥当性や新たな呼び方の可能性を検討していくことにより、不登校をめぐる社会的理解の深化が求められる。

#### 謝辞

本プロジェクトを進めるにあたりワークショップに参加くださった皆様、ご指導受け賜りました桑原敏典先生に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

1) 文部科学省 (2024), 「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」

[https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt\\_jidou02-100002753\\_2\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_2_2.pdf)

(最終閲覧: 2025年10月14日)

2) 文殊紀久野 (2002) 「不登校に対するイメージ変容に関する研究」『山梨県立看護大学紀要』, p. 12.